

## <エッセイ>あるエピソード

著者	梅原 猛
雑誌名	日文研
巻	59
ページ	2-4
発行年	2017-05-21
特集号タイトル	創立三十周年記念特集号
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00006676">http://doi.org/10.15055/00006676</a>

エッセイ

## あるエピソード

梅原 猛

日文研が創設されて三〇年になる。日文研は顕著な発展を遂げており、今も新しい研究成果が次々と出てくるのはまことに嬉しく、私はわが子や孫がすばらしい仕事をしているかのように喜んでいる。

当初、このような研究所が本当にできるとは誰も思わなかったが、私は、やはりそのような研究所を日本そのものが必要としたのだと思っている。時代が必要とするものは、どんな困難があっても生まれざるを得ないのではなからうか。最近、日本の右傾化が心配されている。日本がまた全体主義国家になって、戦前と同じ道を歩むことがあってはならない。新しい日本像を提供し、日本の進むべき道を示す使命が日文研に課せられていると思う。

ここでは日文研創設時の印象深いエピソードを語ろう。日文研がメディアでどのように評価されるかは日文研の運命に関わることである。日本を代表する新聞、朝日新聞社内、創設を控えた日文研の是非について議論があり、私が中曽根首相（当時）と親しく、かつ朝日新聞文化部記者の尊敬の的であった丸山真男を厳しく批判していたので、そのような私を所長とする

日文研はつくるべきではないという意見があったらしい。しかし朝日新聞社には私の著書『隠された十字架』や『水底の歌』の愛読者もいて、社内で見解が分かれていたという。そこで、日文研の創設賛成派と反対派による討論を朝日新聞紙上でさせようという話を持ち込まれ、私は受け入れた。

そして日文研反対派として、歴史学者の大江志乃夫氏、考古学者の森浩一氏の登場が決まり、賛成派として私から二人推薦してほしいといわれた。一人はドナルド・キーン氏に決まったが、もう一人を誰にするかが問題であった。若き日、「思想の科学」誌を主宰する鶴見俊輔氏の影響を受けた私は、哲学は難解な哲学用語ではなく日常の言葉で語らなくてはならないと考えて、『笑いの構造』などの著書を書いた。そのような私の恩人である鶴見氏を二人目に推薦したところ、鶴見氏は討論への参加を快く引き受けてくれた。

ところが、いざ討論が始まると、鶴見氏はマルクス主義者を敵に回すことを恐れたのであろうか、日文研反対論者になったのである。キーン氏は温和な性格で、対立を好まない。そこで私は思いもよらず孤軍奮闘せざるを得なくなった。

そのような反対派の学者たちを相手に、私はソクラテスやゲーテやデカルトの言葉を引用して論を張ったが、彼らはそのような武器となる思想をもたず、ただ驚くばかりで、太刀打ちできなかった。その討論では、傍聴席にいた園田英弘・創設準備室次長に、私がおかしなことを言ったら合図してほしいと頼んでいたが、彼からの合図は一度もなかった。結局、私はどうかこの論争に勝つことができた。以後、朝日新聞は日文研に関して好意的な記事を掲載し続けている。

討論が終わったその日の夜、園田氏をはじめ創設準備室のメンバーと飲みに行った。そこで

園田氏は「梅原さんは、ふだんは昼行灯のようだが、修羅場に強いですね。今日の討論で梅原さんを見直しました」といって初めて私をほめてくれた。いわれてみれば、桑原武夫先生も梅棹忠夫氏も修羅場に強かった。修羅場に強いのが京都学派の伝統であろうか。

その宴会で私は久しぶりに大酒を飲むと、突然、歌を歌いたくなり、村田英雄の「王将」を歌った。そして三番の「明日は東京へ出て行くからは　なにがなんでも勝たねばならぬ」というところで踊り出したのである。私が歌って踊ったのは後にも先にもそのときだけである。

このような過去のできごとが走馬灯のように蘇ってくる。この三〇年が夢か幻のようである。

（国際日本文化研究センター顧問）